

『ウチユウイチアイシテル』
ウチユウの人

半袖の体操着に身を包み、彼女は座り込んでいた。夏が近づくと六月の放課後、彼女の他に数人が校庭で同じ体操服でクラブの活動を終えて座り、雑談していた。

彼女の名は南。新潟県の島で暮らす、女子中学生である。仲のいい里奈が

「南、今日うちでご飯食べるっしょ？」
と尋ねた。

「うん。いつもありがとう」

南は笑顔で答える。

南は幼くして母を亡くした。父は島の外で働いている。母がいなくなつてから、ほとんどすべての家事をこなし、大抵のことは自分でできるようになった。

しかし、彼女はまだ十四歳。

週末には父親が帰ってくるとはいえ、学校に行きながら家のことをするのは大変であった。

そんな彼女に、里奈の家族をはじめとする近所の人たちは優しく手を差し伸べた。平日は毎日のように夕食に呼ばれ、朝ごはんにと夕食の残りを持たせてくれ

た。その日も、夕食を終えて里奈の家を後にしようとする時、里奈の母が

「はい。持って行って。また明日いらつしやい」

とビニール袋を差し出した。

「いつもありがとうございます」

南は礼を言つて家路についた。

いい人たちだな、南は思う。他人である南になぜここまでしてくれるのか。母が入院した時、いや、もつと前から里奈の家族は困ったことがあるたびに南を助けてくれた。以前は持ちつ持たれつだった関係が、今は一方的に頼り切つていることを、南はとてもありがたく感じていた。

里奈の家から自宅までは、少しばかり距離がある。彼女が自宅近くの坂道を登っていると、見慣れない老人が道端にある大きめの石に腰かけていた。この街ではほとんど全ての人間が顔見知りであったが、南は老人の、白髪だがまだまだ量の多い髪の毛、顎鬚、年をとっているが精悍なその顔に見覚えがなかった。誰かの親戚か知り合いが島に来ているのかと思ひ、

「こんばんは」

と挨拶だけして通り過ぎようとした。

挨拶をして、老人が視界から消えて数歩進んだところで、ぎりぎり聞こえるくらいの小さな声で

「東京に行きなさい」

と老人が呟いた。

その声を聞き、南は振り返り老人を見る。が、先ほどと変わらず、彼は遠くの、あと数分で完全な闇となる海の方を見つめ、南と視線が合うことはなかった。

自宅に帰ると、制服のシャツとクラブで使った体操着を洗濯機に突っ込んだ。おばさんからもらった夕食の残りを冷蔵庫に入れ、シャワーを浴びた。知らない老人に会ったことを除けば、今日は至って普通の日常だった。

その夜、南は長い夢を見た。夢を見るのは特別珍しいことではなかったし、夜中にうんうん

魔されることもなかった。

彼女の島での平凡な日常。いつももの家に、いつももの街並み。向かいの庭の小屋では鶏が視点を定めることなく動いているし、隣の家ではじいちゃんが火をたて、何かを燃やしていた。

ただ一つ、彼女の日常と違ったのは、南に好きな男がいたことで、近所に住む彼の名は祐一といった。

小さな頃から祐一にくつついていた南。いつからか、というのはよく覚えていないし、なぜ祐一だったのかというのもよくわからない。祐一は、特別勉強ができるわけでも運動ができるわけでもなかった。とてもおとなしく、率先して遊んだりするような子でもなかった。

そんな祐一と、多くの言葉を交わしてきたはずなのにどんな会話をしたのか思い出せない。いろいろなことをして遊んだはずなのに、何をしたのか覚えていない。ただ、彼女が祐一に好意をもっている、というのを胸の高鳴りが訴えた。

何百回、何千回と繰り返された日常。何百回、何千回と繰り返されるだろうと思えた日常。

いつものように、決して口数の多くない祐一から発せられる言葉。

「俺……東京に行くよ」

祐一の言葉には、これまで彼女が経験したことのない重み、そして決意が込められていた。島では働き口が少なく、家族を支えるために、十七歳の少年が下した苦渋の決断だった。

朝、目が覚めると南は、異様に頭がぼんやりとしているのがわかった。異常にリアルで、長くて、説得力を持った夢だった。

祐一という男の子は一体何者なのか。夢の中の自分はとても悲しんでいた。

昨日会った老人が言った言葉と、共通する場所、東京。南には、それが偶然にしては奇妙に思えて仕方なかった。

南は、しばらく考えた後、東京に行ってみることにした。幸い今日は金曜日で、学校が終わ

つてから支度をして、翌朝早くに出発し、父がいる東京に向かえば、週末を向こうで過ごすことができる。父は南に会いに島に帰ってきているようなものだから、自分が父の所に泊まりに行っても問題はない。問題は自分が一人で東京まで行くことができるか、ということだけだった。

南はまず出勤前の父に電話をして、東京に行きたいと伝えた。たまには一人で遠くに出掛けてみたい。島に用事がないなら、自分が会いに行くので、東京で待っていてほしい、というような内容で。土曜日の朝一番の船で島を出発すれば、新潟から新幹線に乗り、昼過ぎには東京に着けるのではないかと電話で言った。

父はいきなりのことです少々心配していた。が、すぐに納得したようで、お金は足りるか、新幹線の乗り方はわかるか、どうすればいいかわからなくなったらすぐに電話するように、というのを伝えた。毎週のように島と東京を往復している父は、詳細な経路を南に教えた。順調にいけば新潟まで二時間弱、新潟から新幹線で二時間と少し、待ち時間も含めて計五時間ほどで東京に着くことがわかった。

意外と近いな、と南は思った。電話を切った後、洗濯機から洗濯物を取り出して外に干し、

里奈の母が持たせてくれたおかずをレンジで温め、冷凍庫で小分けにしてあったご飯と一緒に食べた。食べ終わって食器を洗い終わると、制服に着替えて家を出た。

学校に行く途中、昨日老人と出会った石の所を通った。しかしもちろん彼は、もうそこにいなかった。道中では、あの老人や夢の中のことについて色々と思考を巡らせたが、学校に着いて友達と話し始めると、南の頭の中からは消えてしまった。

学校ではいつも通り授業が進められ、何事もなくクラブ活動の時間になった。里奈と女子用の更衣室に向かう途中、南は

「ちよつと明日東京行ってくるわ」

と里奈に言った。里奈は

「お父さんのところ？　なんかあんの？」

と尋ねた。

「や。特に用があるわけじゃないんだけどさ」

「なんとなく東京、行こつかなーって」

里奈は

「いいねえ。お土産買ってきてね♪」

と笑いながら言った。

日替わりで球技をするクラブ活動も、いつも通り行われ、まだ明るいうちに南と里奈は帰路に着いた。

いつものように里奈の家で夕食をこちそうになり、里奈の母にも明日東京に行くということを伝えた。里奈の母は、南が一人で東京に行くということに驚き心配したが、気をつけてね、と送り出した。

昨日と同じくらいの、周囲が完全に暗くなる少し前の時間帯に南は家に向かって歩いていて、石がある坂道に差し掛かると南は、もしかして、また老人があそこに座っているのではないかと思ひ始めた。老人が何か、道標のようなものを与えてくれるのではないかと。

しばらく歩いて、老人が座っていた石が見えた。しかし、そこに誰もおらず、それを見た南は、がっかりとは少し違うが、何となく残念な気持ちになった。今のところ、東京に行くということは決まってしまったが、それ以外は何も、自分が東京のどこに行つて何をするのか、何も決まっていない。

南は不安だった。

自宅に着くと、南は朝出発するための準備を始めた。準備と言っても一泊の旅だからスウエットと下着を一組入れて、必要になりそうな小物を入れておけば十分だった。明日は六時に起きて、七時半の船に乗る。朝の予定を確認して南はいつもより少し早く、布団に潜り込んだ。旅行なんていつ以来だろうか。一人旅をこんなに早くすることになるなんて。南は興奮せずにはいられなかった。

